
勝った者が強く負けなかったものが強い魔法の世界

YUM

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勝った者が強く負けなかったものが強い魔法の世界

【Nコード】

N5754Y

【作者名】

YUM

【あらすじ】

なんか行き詰ったんで新しいの描いてみました

プロローグ1

物語の主人公はたいてい（例外もあると思う）が普通ではないでしよう？

たとえただの学園物だとしてもイベントは発生するでしょう

最初はさえない中（高）学生くみたいな感じでも3ページめくらいから

転校生と運命の出会いとか

幼少時代の約束とか

そんな現実^{リアル}の俺にはほぼ100%あり得ないことが発生します

ホントにさえなくてもいじめられてとかドMだとかあるじゃないか
そこになんかよくわからん変な奴が現れたりして変な力を授けたり
ああうらやましいことこの上なしですよ
なので

学園物的な奴をやってみたいと思います

なんだそりゃって思ってる人いるかもしれませんが

さっきの愚痴てきな俺の友達が言っていたこと書いてどくしやを
混乱させてやろうかと・・・

なんで学園物いきまゝす・・・・・・・・？

ここ私立神埼学園高等部

この物語の主人公はこの学校に通うことにした

この学校は魔術師いわゆる魔法使いを育てている学校である

この時代での魔法は日々の生活に欠かせないものでまじめに勉強し
ないとマジで生きていけないのだ

その理由は3つあり1つはほとんどの生活用品は魔法の力で動いて
いること

2つ目は戦争がまだ続いていること

そして3つ目は魔法がろくに使えないまま高等部を卒業すると処分されるのだ

そして今作の主人公名を朱神光^{しゅじんこう}あらため朱神光^{あかがみひかる}は魔法が使えないまま高等部に入学する

プロローグ 2

前回で言っていた処分とは
ぶっ殺されるとかじゃなくて魔力に変えられるだけで痛みとかはな
いが結局
死にます

この作品の中では生物はみな体の中に魔力を持っています
人間の生まれた時の魔力量は100（数字で表しているだけで細かい計測方法はありません）ぐらいあります

この学校に通う生徒はみな5000ぐらいはあるでしょう（目安として考えてください他の作品と比べるとはやめてください）

ですが例外もあります今作の主人公の朱神光^{あかがみひかる}は魔力量が「0」です
（目安ですが0は別にいいかな）

魔力量はコップに入る水の量みたいなものです
魔力を使うとコップの中だけが減ります

つまり魔力量5000の人が1000もの魔力を使うと4000／
5000こんな感じです

ですが朱神光は0／0なわけです（笑）
コップを持っていないのです

入れ物がないのに水を入れようとするどこに入れるのか分からない
くなりますよね

入れ物がないから水も注げないのです

次に学校の説明をさせていただきます

小学校では6年毎日勉強し

中学校では3年毎日勉強します

ではここまで勉強続きで高校生は何をするかと言いますと

高等部では3年間殺し合いをします（わかつてると思いますが魔法のです）

別に高等部だけじゃありません

小学校も中学校も9年間殺し合いますがそれはほとんどありません
みんな子供ですからね授業に出ていれば勝手に高校いけるのにそんな馬鹿みたいに殺しまくる生徒はほとんどいません

（ほとんどというのは魔力を持っている者を殺すとその魔力量は自分に蓄えられるからです）

ですが中学校の卒業式では卒業生だけで殺し合います生き伸びないと卒業できません

毎年の平均では300人卒業するはずが150人つまり半分になります

これは1対1でたたかうからです

高等部では毎日3年間いつ殺されるかわからない状況で勉強に励みます

授業中

トイレ

寮

いろいろなところで戦争があります

ですが殺し合いは義務ではありません

毎日みな勉強だけに励み平和な3年間を送ることもできます
なぜなら高等部では卒業式に殺し合うこともありますし

一人も死なずに卒業した年もありました

こんな学校にもルールがあります

- 1つ目 同学年以外で殺し合うことを禁ずる
- 2つ目 卒業するまで学校から出ることを禁ずる
- 3つ目 魔法が使えずとも戦力になるなら卒業は可能
これだけだあとにはなにしてもおkなのだ

なぜなら魔法が使えない奴を殺すのは魔法が使える奴の糧となり戦場で役に立つことなのだから戦力になる奴をわざわざ殺す必要はない

魔力があっても才能がないやつとかは真っ先に殺されちゃうよね☆

じゃあ説明はこのへんでおしまいにして1話目に行こうかな

第1話 森羅顯現（前書き）

はじまりました

第1話 森羅顯現

あかがみひかる

朱神光は魔力がなく魔法が使えない魔力を持っているものを殺してもなぜか増えない

ではなぜ今まで彼が生きてこられたか
それを見ていこうと思います

視点く光く

俺は魔力がないくせに高等部まで普通に生きていた
そのわけは

魔力がない俺を殺したところで無意味だからだ
しかしなぜ中学校の卒業式で死ななかったかと言うと……

中学3年卒業式準備

く体育館前く

「ついにこの日が来ちゃった……」

「俺魔力0で一度も誰にも狙われず平和に生きてきたのに……」
と俺が言うと

「まあ来てしまったものは仕方がないあきらめて死ね」
と担任の先生が言った

「はあ……」

「そんなため息ついてないでお前の番が来たぞ？」

「俺の番？ ああもう来たのか早いな」

俺はそう言って体育館に入って行った

俺は魔力がないつまり普通は簡単に死んで終わりとみんな思っているだろう

クラスみんなも

先生方も

普通はそう思うはずだ

だが俺は魔力がないだけで普通の人間ってわけじゃない

森羅顕現しんらけんげん

これが俺の特殊能力魔力はいらない

必要なのは紙とペンだけだ

しかしこの能力は不思議なことに俺しかできない

この能力は俺以外誰も知らない

く体育館く

「俺の相手はつと・・・あいつか」

体育館は血まみれでしたいとかが転がっている

「やあキミが僕の相手かい？」

と俺の目の前のきざっばい奴が話しかけてきやがった

「多分そうだと思いますが？」

と俺が言う

「キミは確か・・・魔力が全くない即死確定の落ちこぼれ朱神光君じゃないか？僕はとても運がいいなあ

はっはっはっは」

「そこまで言わなくてもいいんじゃないですか？モブA」

「モブっ?! 僕の名前は水裏学みずうらまなぶだ！」

「で？どうするの？もう勝負始める？結果は決まってるけど」

と俺は挑発してみる

「結果？そうだな僕が勝つに決まっているな
なんたってキミには魔力がないからなあ」

「はいはい・・・じゃあ始めますか？」

「ああいいともバトルスタート！」

なんでお前が仕切ってんだよ

俺は腰に巻いているベルトにつけてあるカードケースから遊戯王の
カードくらの大きさのカードを10枚ほど取り出す

そしてその紙に「虫」と書いてあることを確認しそのカードを学の
方に投げつける

「なんだこのカード？ただの画用紙じゃないか」

そうそれは画用紙を切っただけのもののだが

「それはただのカードだよでもね」

そう言い俺はこう叫んだ

「虫！」

その瞬間ばらまいたカードが形を変え虫になっていく

「なんだこれ！？ひいいい！気色悪い！」

俺の能力森羅顕現は紙に文字を書きそれに変化させる力だ

「お前に魔力はないんじゃないのか？！」

「ああ確かに俺に魔力はないだがこの力は魔力は全く関係ない！」

俺はポケットからメモ帳を取り出しシャーペンで文字を書いていく
そしてそのページをちぎって右足に張り付けるそしてもう一度書き
左足にも付ける

「俊！」

そう叫ぶと俺の体が軽くなり走るとだんだん加速していく

あっというまに学の前まで近づけた

「うわあ！近づくな！呪文詠唱の時間もない！・・・」

なんか言ってるがきにしない

メモ帳にある文字を書きそのページを学に張り付ける

「死」

その瞬間学はしんだ・・・

これが魔力がなくせに俺が生きている理由だ・・・」

第1話 森羅顯現（後書き）

中2病？知らん知らん

第2話 **h i g h c a t t l e s i c k , K o w l o o n D r a g o n**

視点　　光　　

「さて入学式まがいが始まっちゃうからさっさと体育館いくかー」
とかふざけてると体育館についた

　　入学式　　みよ　　んみよ　　ん　　終了　　

「さて俺のクラスはなんじゃろげ」

そんなこと言いながら生徒手帳を開くこの学校の生徒手帳は今で言うけーたいみたいなんだ開くと学校の行事説明や1ヶ月の予定なんかも見れそこに新入生のクラスが書かれている

それに生徒全員のプロフィールが乗っていて電話やメールが可能である

魔力量もわかるまあそのおかげでいままで誰にも相手にされなかったんだけど

「えーと　Aクラスか」

俺はAクラスだった

ちなみにクラス分けは卒業式の成績と高校入試もどき（点数に関係なく入学できる）の結果によりA　Fまでのクラスに振り分けられるAが1番上でFが超ざこってことだね

俺は魔力がないけどそこそこ勉強してるので入試もどきでは満点を取り掲示板にものせられたがはつきりいってどうでもいい中学の時から試験のときはずっと1位とってたのでいまさらってかんじです
「AクラスAクラスと・・・3階か・・・めんどくさい」

ちなみにこの学校は学年はない新入生も3年生も同じクラスになる

「3階までのぼるのとかまじたるいFクラス近いからそっちに紛れ込んでおうかな」

そういいすぐそこにあったFクラスに侵入成功
とりあえず後ろの方の席に座ると同時に

チャイムが鳴った

「えーわたしはこのFクラスの担任の西原ですこれから新入生に自己紹介をしてもらいます」

西原という年老いた男性がそういったので俺を含めた新入生が順番に自己紹介していく

俺の順番がまわってきたのでおれは

「俺は今日から皆さんと学校生活を送ることにした朱神光ですよろしく」

と俺が言うともみんなが

「朱神光って入試もどきでトップだったやつじゃねえの？」

「なんでそんなやつがFにいるんだ？」

あれ？俺って意外と有名人？

「朱神光くんなんて生徒はFクラスにはいませんよ？えーと・・・

Aクラスですね」

と先生が言った

「Aクラス?!」

とくらすのほとんどの奴がそう言った

「はい俺は確かにAクラスなんですけどわけあってFクラスに来ました」

「わけとはなんです？」

「3階まで上がるのがめんどくさいからです」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・はあ？」

うんこうなるのはわかっていた

「いやだってつかれるじゃん？」

こうしておれの学校生活は始まった

第2話 h i g h c a t t l e s i c k , K o w l o o n D r a g o n

タイトルの意味？しりません

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5754y/>

勝った者が強く負けなかったものが強い魔法の世界

2011年11月29日17時52分発行